

[日時]

2016 年 6 月 10 日 (金)

[司会・進行]

中江研 (准教授)

[担当学生]

湊大地 奥田浩平 家入健 岡野さくら 後藤沙羅 馬場智美

吉澤賢 (M1) 佐藤拓巳 (B3) 荒木佑介 梅原きよみ 楠橋請ノ助

向上沙希 斉藤潤 硯愛画 初山美帆 吉本美春 (B1)

神戸建築学 第 39 回

「エリアリノベーション / 計画的都市から工作的都市へ」

馬場 正尊 建築家 / Open A 代表 / 東京R不動産ディレクター / 東北芸術工科大学教授

講演概要

都市は現在、ある分岐点に立っている。戦後、高度経済成長や人口の増大の中で生み出された日本で作られた建築物の多くは国や大企業の均質な資本によって生み出された均質な建築物である。それら均質な建物は日本に均質な都市風景をもたらした。経済成長も落ち着き、人口が減少へと転じた現在、それらの建築物には老朽化や空き家が目立つようになってきた。馬場氏は計画的都市から工作的都市への移行が生じると話した。近代の建築手法として、建築家や施主が計画し、ゼネコンや工務店がそれを建造する。そして最終的に使い手に渡するというプロセスが存在した。現代、そしてこれからの建築手法のプロセスは近代までの流れに逆行する。建築に対して、大工やアーティスト、住民など多種多様な介入が生じることによって、使い手からむしろ計画、建造にいたるまで建築に参加していくのではないだろうか。

前述の通り、馬場氏はこのような新しいプロセスで構成される都市を工作的な都市という。既存の古い建造物にはリノベーションという手を加えてゆく。建築は月日とともに物語を持つ。元の住人や従業員といった使用者が紡ぎだしてきた物語は建築にさらなる深みをもたらし、建築は使用者に寄り添っていく。そしてリノベーションされるとき、その物語は完全には潰えず、どこかその形を残しながら新しい物語を紡いでゆく。新たな使い手を「工作的な人々」と馬場氏は称しており、彼らは空間を、彼ら自身の行動や生活に合わせて再編成、再構成していくという。既存の空間の中に新しい違和感を構成しつつも、前の使い手の熱をどこかに残して彼らは住み継いでいく。馬場氏はそうしたことが連なる

ことで、戦後の日本を支えてきた、言わば個性のない均質な都市を新しい都市の風景としてアウトプットしていけるのだという。

働き方というのも常に変化し続ける存在である。機械やロボットが人間に代わって作業するようになり、自分たちの働き方はlaborからworkへ、そしてplayへと変貌しつつある。仕事が変わるとそれに合わせて生活も変化していくことであろう。第1次、第2次、第3次産業の、そして住居の区分をなくし、それらを一体化していく。それぞれの役割が融合、統合していくことが工作的都市では可能となる。馬場氏が注目するワードの1つに「メディア」がある。彼は大学時代、自らが手がけた雑誌「A」の編集長のほかに博報堂での経験を通してメディアが持つ力を感じてきた。そのことは氏の著書の中でも多々触れられていることで、東京R不動産のホームページは実にビジュアルに富んでいる。メディアの力は人と建築を結びつけることもできるが、同時に建築そのものを破壊しうる力を持ったものでもある。部分と部分が繋がって面になるように、このような試みが随所で行われやがて地域全体に広がる。不動産、建築、メディア、デザインが密接にかかわりあう4環構造であることを示した。4つが連携することで、地域と、そして建築と人が繋がることができると氏は話す。

最後に馬場氏は形容詞の建築について語った。既存の何か目的のある名詞でできた建築から、つい何かをしてしまう、したくなる空間、つまり何か曖昧な形容詞であらわされる建築を目指しているという。馬場氏が目指す新しい空間構成には期待がもたれるばかりである。(佐藤拓巳)



馬場 正尊 | Masataka Baba

建築家/Open A代表/東京R不動産ディレクター/
東北芸術工科大学教授。

1968年佐賀県生まれ。1994年早稲田大学大学院建築学科修了。博報堂で博覧会やショールームの企画などに従事。その後早稲田大学博士課程に復学。雑誌『A』の編集長を経て、2003年OpenA Ltd.を設立。建築設計、都市計画、執筆などを行う。同時期に「東京R不動産」を始める。2008年より東北芸術工科大学准教授、2016年より同大学教授。建築の近作として「TABLOID」(2010)、「観月橋団地」(2012)、「道頓堀各座」(2013)など。近著は『RePUBLIC 公共空間のリノベーション』(学芸出版社、2013)、PUBLIC DESIGN 新しい公共空間のつくりかた』(学芸出版社、2015)

私たち第39回神戸建築学実行委員会は、講演会の2ヶ月ほど前から馬場正尊さんの事前学習を進めてきました。その中で学んだものと、講演会の内容をリンクさせながら、馬場さんのヴィジョン、見方に対して私たちが考えたことを今回、吉澤がまとめ、述べさせていただきます。

今回の講演では、大学生に対して強いメッセージが込められているように私は感じました。例えば、講演会の内容にあった大阪の「北浜テラス」では、公共空間と私有空間とを結びつける一見突飛なものでも、合法であるといえるエピソードは、既成の概念にとらわれがちな今の学生に対して、少し違う視点を与えてくれているような気がしました。他にも、馬場さんは大学時代に同人誌を作っておられ、それが雑誌『A』となったことや、馬場さんの先生である石山修武氏のお話など、それらは大学時代の経験が社会人になっての活動の土台や、理論の根本になっているということを私たちに伝えてくれているような気がしました。

また、講演会後の質疑応答では、人口減少による都市の取捨選択、情報化社会における建築のあり方など、現在の社会やシステムが抱える問題点に対する解決策、提案を馬場さんに求めるような質問がありました。その質問に対して馬場さんは、それらの問題点を自らも非常に重要な問題として捉えているとした上で、結論ではないが、この国の都市は取捨選択の時代に陥らざるを得ないこと、また、情報化社会といっても結局建築はface to faceで人と人が会う空間であり、そこで、合理性では語りえない、つい何かをしてしまうデザインが重要になってくるだろうと答えておられました。この内容について私は、都市が「計画的都市」から「工作的都市」になっていくなかで、自らが主体となって動くことのできる時代、逆に動かなければどんどん置いていかれる時代になっていくというメッセージ性が込められていたのではないかと感じています。

一つ、講演会の内容に関して疑問に思ったことがあるとすれば、それは団地のリノベーションについてです。馬場さんの考えるリノベーション、それは、あえて内部を完全に完成させず、利用者自身に空間を作る余地を残すことで、より人の持つクリエイ



ティブな部分を引き出すというもので、その手法に関しては、非常に面白く、目新しい価値があることだと感じました。しかし一方で、実現しているのを見ると、リノベーション後の団地の利用者はアーティストなどクリエイティブな人の層が大半を占めており、一般の人にはその価値を伝えることができていないのではないだろうかと感じました。やはり、どんなに素晴らしいものを作っても、それをより多くの人に伝えることができれば、社会自体を改善することはできず、都市全体をより良いものにすることは難しいのではないかと私は思います。

最後に、今回のテーマである「エリアリノベーション」は、現代で重要視されている「持続的社会」の実現に貢献できるものだと私は感じました。戦後の日本の成長都市時代は今や終止符を打ち、人口減少が目立つ現代では人よりも建物の数の方が多くなり、その余った建物をどのように活用し、そして、これからの都市をどのように維持管理をしていくべきかという問題が浮上しています。そのような時代の中で、馬場さんの考えるエリアを絞ったリノベーションまちづくりは、そのエリア内の住民が自分の町に対して誇りを持ち、持続的都市作りが行われていく一つのきっかけになりえるものだと私は感じました。また、人口の流動性が高い現代では、その地域に住む魅力というものは必要不可欠だと私は考えています。その魅力を生む一つの手法としてリノベーションは効果的な手段であると感じるとともに、活発なエリアを作り、持続的なまちづくりを成しえる可能性を秘めていると私は感じました。(吉澤賢)



[日時]

2016 年 7 月 10 日 (日)

[司会・進行]

槻橋修 (准教授)

[担当学生]

谷大蔵 唐木拓巳 塩谷沙織 仲川絵理 三井貴裕 山岡義大 (M1)

小林諒 (B4) 高倉恵 竹本奈央 中島安奈 伏原小裕 松井優香 (B2)

田中佑季 力武真由 CHEN KEN (B1)

神戸建築学 第 40 回

「BESTIARY: 寓話集」

スミルハン・ラディック 建築家 / Smiljan Radić Arquitecto

TOTOギャラリー・間と神戸大学の共催プログラム、第40回神戸建築学スミルハン・ラディック神戸講演会「BESTIARY: 寓話集」が神戸大学百年記念館六甲ホールで開催されました。有志の学生が主体となり、数か月前より運営や資料作成などの事前学習に取り組んでまいりました。今回はスミルハン・ラディック事務所で働く日本人スタッフである原田雄次さんに日本語通訳を務めていただき、ラディック氏はスペイン語でレクチャーされました。

レクチャーが始まると、まずスクリーンに上半身がワシ、下半身がライオン、体の大きさが8倍もあるといわれる中世の幻獣「グリフォン」(『不思議の国のアリス』のジョン・テニエルの挿絵)が現れる。彼は寓話集のひとつとしてこのグリフォンを挙げ、彼のデザインはこのグリフォンと同じようにいくつかのグループごとのまとまり、すなわちコラージュからできていると語る。ゼロ・ベースから新しい概念を生み出すのではなく、過去にそこに在ったものを部分的にうまく組み合わせる、といった具合に。そのアイデアの根源は、ラディック氏の生きてきた時間の中での体験や発見であり、とにかくデザインの引用元を秘密にしがちなわたしたち神戸大学の学生には斬新で、興味深い手法であっただろうとも感じる。

今回のレクチャーは、彼のここ数年のプロジェクトをオブジェのようなものから巨大なタワーまで13体の「グリフォン」について、そのプロジェクトごとの関係性という点から語られた。彼はその中でスケールを変えながらコラージュの素が転用されていくことで、それぞれの寓話が<ファミリー>という繋がりをつく

り出すとも語る。はじめは、<ファミリー>という表現には違和感を感じていたのだが、彼の関係性の物語が展開されていくにつれて、わたしの中で紐解かれていった。

例えば、2010年の第12回ヴェネチア・ビエンナーレで発表されたインスタレーション「魚に隠れた少年」は、その年にチリであった大地震に対するシェルターとしての役割をもつのだが、これはデイヴィッド・ホックニーがグリム童話『あめふらし』の挿絵として描いた同タイトルのイメージをコラージュしたもので、作中での<隠れる>という行為をフィジカルなシェルターとして創出させるようにしている。

「フラジャイル」と名付けられたワイングラス製のタワー型のオブジェは、同じく『あめふらし』の作中に登場する王女の住む塔のイメージを表現したモデルである。ラディック氏は、これは建築的な根拠も背景も用途もない<ゲーム=遊び>でつくられたインスピレーションのモデルだと言っていたが、サンティアゴのタワーコンペではこのモデルを元に、60年前にバックミンスター・フラーが考案した「テンセグリティ」や、セドリック・プライスの「鳥かご」の安定した構造を用いながら、<フラジャイル=はかなさ>をもつデザインをしたという。

チリで「直角の詩に捧ぐ家」を設計した際は、ル・コルビュジエの詩画集『直角の詩』に収録されたリトグラフからシェルターの形や内外環境のあり方を見出す。これは、最初のビエンナーレのインスタレーション「魚に隠れた少年」が異なるスケールをもって現れたものだと考えられており、両者には部分的に似た造形が施されている。

「サーペンタイン・ギャラリー・パビリオン2014」では、童話



スミルハン・ラディック | Smiljan Radić

建築家 / Smiljan Radić Arquitecto

1965年チリ、サンティアゴ生まれ。1989年チリ・カトリック大学卒業後、ヴェネチア建築大学で学ぶ。1995年にSmiljan Radić Arquitectoを開設。2009年よりAIA名誉会員。2001年チリ建築家協会35歳以下の最優秀国内建築家賞受賞。2015年Oris ACO Award受賞。主な作品に「サーペンタイン・ギャラリー・パヴィリオン2014」(イギリス、ロンドン/2014年)、「直角の詩に捧ぐ家」(チリ、ビルチェス/2012年)、「NAVEーパフォーミング・アーツ・ホール」(チリ、サンティアゴ/2015年)など。展覧会に、ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展(2010年)、TOTOギャラリー・間25周年記念展「GLOBAL ENDS」(2010年)、銀座メゾンエルメス「クローゼットとマットレス」展(マルセラ・コレアと協働)(2013年)などがある。

『わがままな大男』に出てくる大男の住む城のモデルと、ロマン主義時代のフォーリーがもつ廃墟性を関連付けつつ、古いファッション誌の服の型紙から発見した窓の開け方など、内外の関係性は「直角の詩に捧ぐ家」と同じように考えている。

各々の作品の成り立ちはひとつに言語化されることなく、さまざまな題材から要素を結びつけて各々の寓話として完結させているのだが、このように彼の作品を羅列的に解釈していくと、コラージュの素が所々に転用されており、スケールが拡大・縮小され、それらがまるで血の繋がりのような家族関係を築いていることが＜ファミリー＞たる所以なのだと理解できた。またそれらは、仮設的な構造物やつかの間の隠れ家のような簡素で痕跡を残さないような作品たちを通して、移ろいゆく環境や人間の営みのはかなさを提案しているようであった。

レクチャーを聴き終わって気づいたことは、わたしたちが事前によりサーチしていたときの解釈は間違えていた、というよりも、彼のデザインについて勘違いをしていたということであった。講演に向けてグループで事前学習に取り組んだが、その段階ではこの展覧会のテーマである「寓話集: BESTIARY」とは、例えば『あめふらし』や『わがままな大男』といった童話と彼の作品がリンクしていることを表すと捉えていた。しかし彼はマニフェストを貫くことに興味はなく、たくさんの出発点、手段、方向性をつくり出すことの方が大事だと語っていたように、彼はもっと広く世界を見つめ直し、チリという国土において今、どのような建築が考えられるのかを示そうとしているようであった。

チリの現代建築は、太古からの歴史や文化と新しい技術や素材との融合を目指しており、海外からの影響とチリ独自の文化の間でどうあるべきかを模索しているようである。それは文化を守りながら現代的な生活を創造することへの挑戦であり、すなわちチリの建築家たちが、単純性、経済性、機能性に重きを置いていることの現れである。それぞれの建築家がチリの異なる文化に身を置くことによって生じる建築的多様性もチリ現代建築の特徴となっている。レクチャー後の質疑でもあったが、チリの著名な建築家のひとりであるアレハンドロ・アラヴェナ氏との関係性もまるで



外国の建築家とのようだと語っていたように、チリという国の一般解をつくろうとしているのではなく、その多様性のひとつとしての個人の世界観を表しているようであった。

ラディック氏は、講演の中で何度か＜ゲーム＞や＜遊び＞という表現を用いて、グリム童話やデイヴィッド・ホックニーの挿絵のモデル（建築的な根拠も背景も用途もない模型）をいくつか紹介する。マスキングテープなどの日用品を素材に用いてつくられた模型たちは、「色あせたかけらを拾い集めて、再構築する」と藤本壮介さんとの往復書簡（TOTO出版から同時発行された作品集『スミルハン・ラディック 寓話集』に収録）でも述べているように、彼の前では、テンセグリティも、有名なリトグラフにこめられた空間も、チリにある原始的な仮設テントや石ころと同列に、過去という時間を背負いながらも、形骸化した素材に還元されているようだ。そしてそれらが、建築史のメインストリームとは遠く離れた、辺境の地であるチリに流れ着く。本来の時間の流れとは異なるが、そこに近代が打ち捨ててきた時間の価値が発生し、それがはかなさともつながるように感じる。他国の価値観や技術を、遠く離れた場所から時間をかけて「流れ着いた何か」であると捉え、ある意味遊びのようにそれらを組み立てて建築をつくる彼のデザインには、いずれチリを代表するかもしれない新たなモダニティの獲得が垣間見られるようである。（谷大蔵）

